

—山野に響く「ししおどし」—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

「ししおどし」でけものを追う

「ししおどし」とは、田畑を荒らしにやってくる鳥やけものを追い払うための仕掛け(装置)のこと。鹿威(しかおどし)ともいう。

節止めた太めの竹筒の中ほどを支点として回転するようにし、水を受ける部分を斜めに切ってある。

流れ落ちる水を受け、水がたまってくると、竹筒の重心が前にきて竹筒が傾く。すると、中の水が吐かれて反動で勢いよく戻ったときに、竹筒の尻が石の頭に当たって、高い音を発する。この音でびっくりして鹿やいのししなどが逃げていく。

ししおどしは、現在では庭園設備のひとつで、もっぱら風流のためのものになっている。静かな日本庭園で、どこからかコーンという「ししおどし」の澄んだ音が聞こえてくるのはいいものだ。

「ししおどし」を日向(宮崎県)では左近太郎と言う。左近は、迫(さご)で谷間のこと。日向の民謡「刈干切唄」に

もはや日暮じゃ迫々かける……

とある迫々は谷間のこと。谷間の水流を利用した、ししおどしを昔の人はこのように

呼んだのは粋だ。太郎は擬人化した愛禰。

「ばったり」でヒエをつく

「ししおどし」に似た装置に、「ばったり」というのがある。流れる水を受けて、木のテコを動かし先端の杵(きね)を上下させて、ヒエ、アワ、コメなどをつく。東北地方や信州、飛騨地方などでこの言葉が残っており、「ししおどし」と同意語。

オホーツク海から吹いてくる北東の冷湿風“やませ”が襲う東北地方などでは、昔はコメなどとても作れなかった。ヒエ、アワ、ソバ、大豆などの雑穀が中心で、主食のヒエを「ばったり」の杵と臼でついた。

岩手県山形村の「ばったり村」は有名である。山村文化を伝えようと、沢水を利用した「ばったり」を復元し、囲炉裏を復活し、東京などから客を招いている。岐阜県高山市に飛騨民俗村がある。

村内の案内板に次のようにある。

バツタリ小屋(唐臼)

水を利用し天秤を応用して米や稗を精白した唐臼を、この地方ではバツタリといい

ます。

このバッテリーは、白川郷三尾河村(現在の荘川村三尾河)にあったもので、白を2つ使って能率をあげるようにできています。

山峡の谷川の水の音に交じって稗をつくバッテリーの音は、のどかな風情でした。

写真の右の建物はバッテリー小屋，中央は水を導く2つの木管。小屋からテコ(天秤)が2本出て、水を受け、テコを動かす。

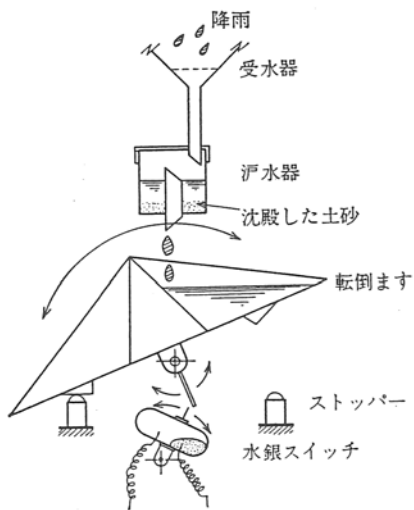
「ししおどし」「ばったり」は雨量計の原点だ

気象庁や防災機関の転倒ます型雨量計の原理を図で説明しよう。

降雨は、口径 20cm の受水器で受ける。雨水は漏斗からパイプを通して泪(濾)水器に入り、土砂などを取り除く。受水器にもゴミよけの二重金網(図の点線)がある。



バッテリー小屋 (飛騨民俗村)



転倒ます型雨量計の原理 (気象ハンドブックから)

きれいになった雨水は、片方の転倒ますに入る。まずは三角形で軸受を境に両側にある。まずに受けた雨水の量が 0.5mm に達すると、ますが傾いて雨水を排出し、同時に他方のますが受水を始め、同じく 0.5mm の雨量に達すると傾いて排水するという操作を、降雨が続く限り交互に繰り返す。

ますが傾斜(転倒)するたびに、水銀スイッチが働いてパルスを発する。パルス信号は有線や無線によって遠く送り、印字された記録紙や計数器を見て雨量を知る。

日本の 10 分間雨量の最多記録は、1946 年 9 月 13 日に四国の足摺岬で観測した 49mm。

そのとき転倒ます型雨量計があったとしたら、約 6 秒に 1 回の割合でカタカタとますがひっくり返っていたはずだ。

ハイテク時代の雨量計も原点をたどれば、昔の「ししおどし」「ばったり」という素朴な仕掛けに似ているとは、びっくりした。